

# 第1章 波佐見町と波佐見焼

## 1 波佐見町の位置と概要

波佐見町は、長崎県の中央北部に位置し、長崎県佐世保市・川棚町、佐賀県の有田町・山内町・武雄市・嬉野町と隣接する県境の町です。東西10.5km、南北7km、周囲33kmを測り、総面積は55.97km<sup>2</sup>です。

町の周囲には木々に覆われた緑豊かな山々がめぐり、その山々を発した多くの小河川は、谷間をぬって波佐見川へと注ぎこんでいきます。そして、波佐見川の流れに沿うように、中央から西部にかけて平野が広がっています。波佐見町は山あいの盆地の町であり、長崎県内では数少ない「海無し町」ですが、様々な「山の産物」に恵まれています。中でも、町南東部の丘陵一帯から産出する磁器の原料 - 陶石 - は、江戸時代、波佐見の地にやきもの生産 - 窯業 - を定着させ、発展させることになりました。

このように、波佐見町は、燃料（木々）水（小河川）土（陶石）というやきもの生産に欠かせない3つの条件が揃った、窯業に非常に適した環境を持つと言えます。

（註1）江戸時代には銅、明治時代には金（「波佐見金山」）が採掘されていた。

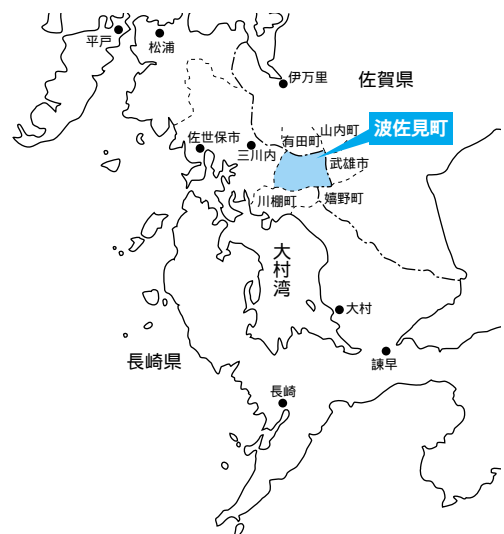
## 2 波佐見焼について

波佐見の窯業は、江戸時代初期、今から約400年前に始まり、以降、一度も途絶えることなく続けられてきました。現在、波佐見町の人口は15,679人、世帯数は4,641世帯を数えますが（2004年3月末）、町の就業人口約8,500人のうち窯業関係者は約4割を占め、110社程の窯元が、日々多くのやきものを生産しています。とくに、和食器の出荷額は国内全体の13%にも及び、長崎県下では最大、全国でも第3位の実績を誇っています。

波佐見町は、400年という長い歴史に培われた窯業の伝統を保持しつつ、現在もなお「やきものの町」として生き続けているのです。

ところが、波佐見で生産されたやきもの、「波佐見焼」は、残念ながら、全国的に知れ渡っているとは言えません。それは、江戸時代には当時の積出港の名を取り「伊万里焼」と、そして、明治時代以降は、積出駅の有田の名を取り「有田焼」と称されてきたためです。「伊万里焼」・「有田焼」の中には、実は多くの「波佐見焼」が含まれているのです。

それでは、次章以降、波佐見焼の奥深く豊かな400年の歴史、いわば、波佐見焼をめぐる多くの人が織りなしてきた壮大なドラマをひもといいてみることにしましょう。波佐見焼がいつ頃成立し、成長・発展を遂げてきたのか、また、波佐見ではどのようなやきものを生産してきたのかを是非ご覧になって下さい。



## 第2章 波佐見焼の歴史

### 1 波佐見焼のあけぼの

織田信長や豊臣秀吉が天下統一へのラストスパートをかけ、戦国の世がまさに終わろうとしていた天正年間（1571～1591）の頃、肥前（現在の佐賀県・長崎県の一部）で初めてやきもの - 陶器が焼かれます。<sup>（註1）</sup>

その後、16世紀末から17世紀の初めにかけて、陶器生産は肥前へ広まりを見せ、肥前産の陶器 - 唐津焼 - は、瀬戸・美濃産陶器と国内市場を二分するまでに急成長を遂げていきます。波佐見の地に初めて窯が築かれ、陶器の生産が開始されたのもちょうどこの頃です。

平成5年（1993）稗木場地区に所在する下稗木場窯跡の発掘調査は、波佐見焼の歴史に新たな1ページを加えることになりました。物原の調査によって出土したやきものは全て陶器で、皿、碗、船徳利、壺、大型の甕などが発見されています。これら出土品の中には、従来まで波佐見最初の窯とされてきた畑ノ原窯跡のものよりも、さらに時代が遡る様々な特徴が見られ、下稗木場窯跡は町内最古の登窯であることが明らかになりました。

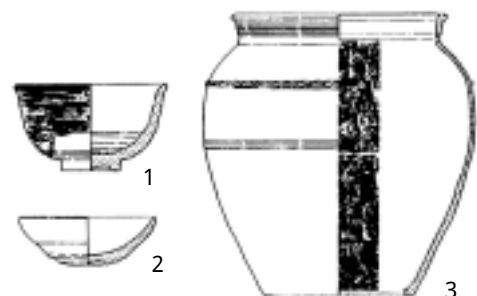
同時に、窯体も調査しましたが、1室の大きさは、幅2.3m、奥行1.9mほど、窯の全長は22m以内、部屋数も12室以内に収まる小規模な登窯であったことが判明しています。

下稗木場窯跡が営まれていた年代は、製品や窯の特徴から1590～1610年代頃と考えられます。ほぼ400年前、波佐見窯業は下稗木場窯跡の陶器生産で幕を開けたのでした。一つの小さな窯でスタートした波佐見焼ですが、その後、国内外のやきものの歴史に巨大な足跡を残すこととなります。

（註1）佐賀県北波多村所在の岸岳古窯跡群と考えられている。



下稗木場窯跡出土品



#### ポイント

1600年前後～1610年代

**波佐見窯業のはじまり** 肥前地区最古の陶器窯 佐賀県北波多村 岸岳古窯跡群  
**陶器生産** 肥前地区で作られた陶器 「唐津」

## 2 磁器の誕生

豊臣秀吉による朝鮮出兵、文禄・慶長の役（1592～1598）の後、参加した九州各地の大名達は多くの朝鮮李朝の陶工を日本へ連れ帰りました。その陶工達によって、様々な新しい窯業技術が肥前へもたらされます。中でも磁器生産の技術は、肥前窯業界を大きく進展させることになりました。以前まで輸入にたよる他なかった磁器は、李朝陶工の力添えによって、初めて国内で、肥前で、生産できるようになったのです。

当時、波佐見の地は大村氏が領有していましたが、領主である大村喜前公も、多くの李朝陶工を連れ帰りました。その一人である李祐慶によって、慶長4年（1599）に築かれたと言われている窯が、波佐見にはあります。それが、村木地区に所在する畑ノ原窯跡です。

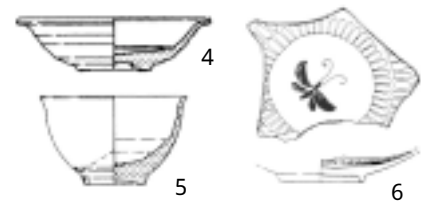
畑ノ原窯跡は、昭和56年（1981）に発掘調査が行われ、窯の部屋数約24室、全長約55.4mを測り、当時としては巨大な規模を持つ窯であったことが判明しています。出土した製品は、陶器（溝縁皿）を主体とするものの、僅かですが磁器も含まれ、陶器と磁器と同時に焼成していたことがわかりました。畑ノ原窯跡は、波佐見における磁器の誕生、さらには、国内磁器生産開始期の様相を知る上で、非常に重要な窯であると言えます。

畑ノ原窯跡出土品の様々な特徴から、李朝の陶工が深く関わっていたことは推測されますが、「李祐慶」という名前の人物が実在したかどうかはわかりません。また、操業年代は、これまでの多くの研究成果に基づくと、1610～1630年代頃と考えられ、言い伝えどおり、慶長4年（1599）に開窯を求めることは難しくなってきました。

しかし、畑ノ原窯跡は、そのすぐ側にある古皿屋窯跡・山似田窯跡と同じく、波佐見の地で最初に磁器焼成に成功した窯であることは間違いありません。波佐見では、以降、磁器生産を押し進めていきますが、その礎を築いたという点で、最も記念すべき窯と言えるでしょう。



畑ノ原窯跡窯体



### ポイント

#### 1610年代～1630年代

**磁器生産の開始** 国内では有田とほぼ同時期に磁器生産に成功 肥前地区の磁器 「伊万里」  
**陶器・磁器生産** 朝鮮李朝陶工の関与（波佐見：李祐慶、有田：李三平）

### 3 青磁の時代

寛永14年（1637）、佐賀藩の有田・伊万里では、藩による窯場統合によって、陶器生産を主体とした窯が廃止され、以降は磁器の生産が主流となります。大村藩の所領であった波佐見もほぼ同様の動きをみせ、1630年代頃には本格的な磁器生産を開始します。

1630～1650年代、有田の窯では、染付を多く生産し、また、色絵も焼き始めていますが、波佐見の場合、青磁を中心に生産しました。

当年代を代表する窯として、三股地区に所在する2基の窯、三股古窯跡<sup>註1)</sup>、三股青磁窯跡<sup>註2)</sup>があげられます。三股地区は、磁器の原料である陶石を豊富に埋蔵している地区で、畑ノ原窯跡などの陶工達が磁器の本格的な生産を始める為に、この地へ移動したと考えられています。磁器を作るためには、やはり、その原料が近くにあった方が便利でしょう。

平成9年（1997）、三股青磁窯跡の発掘調査が行われ、大量の青磁が出土しています。青磁の釉薬は、水色に近い透き通った色合いを基調とし、器の表面に、草花の模様を流れるように彫り出したものが多く見られます。また、牡丹や梅樹の形を貼り付けたシックな製品も作られていました。技術的に、肥前でトップレベルの青磁であったことは間違いありません。また、この窯で生産されたと考えられる青磁は、滋賀県彦根市<sup>註3)</sup>、東京都汐留遺跡<sup>註4)</sup>、龍野藩脇坂家屋敷跡<sup>註5)</sup>、新潟県高田城跡<sup>註6)</sup>、宮城県仙台城跡<sup>註7)</sup>など、主に富裕な人々の住居跡から出土しており、当時、かなりの高級品であったと思われます。

磁器生産が始まりたかだか20数年の後、今から約350年も昔に、波佐見では非常に優れた青磁を生産していたのです。

（註1）平成5年（1993）調査。

（註2）『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984

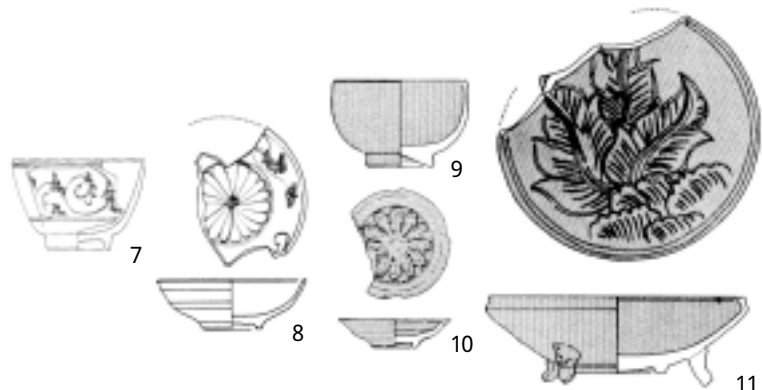
（註3）『汐留遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター 1997

（註4）註2に同じ

（註5）金森安孝「仙台城本丸の発掘調査」『考古学ジャーナル』442 1999



青磁貼花梅樹文天目台



#### ポイント

##### 1630年代～1650年代

**磁器生産の本格化・専門化** 陶石が採れる山中に陶工が移動し窯を開く

**青磁生産** 多様な技術（彫り・貼り付け等）を駆使した優れた青磁

## 4 海外輸出の時代

17世紀の中頃、中国では明朝から清朝へと政権が交代しますが、清朝の支配に反対する人々が各地で内乱を起こします。その結果、多くの窯が壊され、また、他国との貿易を禁止してしまい<sup>(註1)</sup>、やきものの輸出は完全に途絶えてしまいました。それまで、中国のやきものを世界中に運んでいたオランダ東インド会社などの貿易商人達は、その代わりに、力をつけつつあった肥前のやきものに目をつけます。このようにして、肥前のやきものの海外輸出が始まりました。17世紀後半代の肥前窯業界は、輸出品の増大によって、これまでにない活気をみせることになります。

波佐見でも、海外からの注文が殺到し生産が追いつかなくなったのでしょうか、寛文年間(1661~1673)を中心に、次々と新たな窯が開かれていきます。また、寛文6年(1666)大村藩は三股(現永尾地区)に皿山役所<sup>こばやまかまあと</sup>を設け、やきもの生産の直接的な管理を行うようになります。

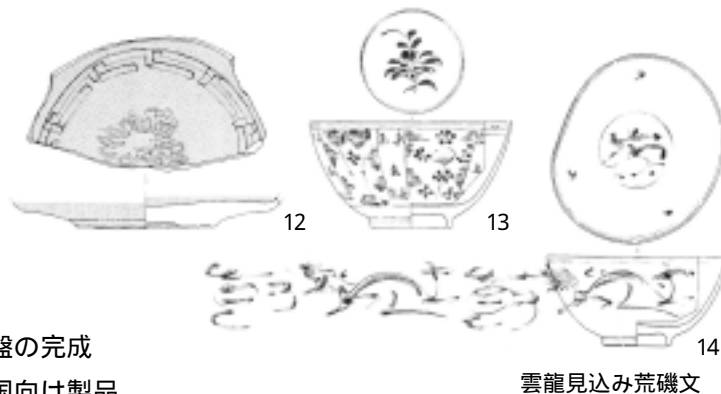
波佐見で焼かれた海外輸出品には、青磁の大皿と染付の大碗・鉢があります。青磁大皿は、主に、永尾地区の木場山窯跡<sup>こばやまかまあと</sup>で生産されていました。口径が30cm以上ある大きな皿であり、内側には草花などの模様が華麗に彫り出されています。また、代表的な染付には、雲竜荒磯文大碗・鉢<sup>うんりゅうあらいそもん</sup>があります。器の外側に雲と竜、内側には荒磯文と呼ばれる模様を描いたもので、肥前一帯で盛んに作られていました。これらの製品は、長崎出島を通じ、インドネシアなど、主に東南アジア諸国へ大量に運ばれて行ったと考えられています。<sup>(註3)</sup>

波佐見焼が荒波を越えて海外へ運ばれていた時代、海外輸出時代は、17世紀中頃から末頃まで、約40年間続きます。この時代、輸出景気の追い風にのり、大村藩の支援を受けることによって、波佐見は磁器の大生産地へと発展を遂げました。

(註1) 海禁令：1656年

(註2) 平成2年(1990)調査

(註3) トルコのトプカプ宮殿所蔵品に木場山窯跡と思われる青磁が見つかっている。大橋康二「トルコで発見した肥前の青磁」『目の眼』259 里文出版 1998



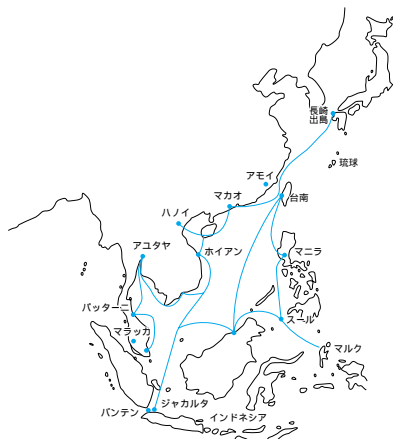
### ポイント

#### 1650年代~1680年代

海外輸出品の生産 中国陶磁の代替品、

1660~70年代 産業基盤の完成

染付鉢・青磁大皿生産 主に東南アジア諸国向け製品



出島から東南アジアへのルート



波佐見から出島までのルート

(中国船貿易地：大橋康二・坂井隆『アジアの海と伊万里』新人物往来社 1994より)

## 5 「くらわんか」の時代

17世紀の末頃に中国の内乱がおさまると、中国のやきものは再び世界中へ輸出されることとなります。<sup>(註1)</sup> 質・量ともに肥前のやきものを上回る中国のやきものは、海外の市場を急速に奪い返していきました。その結果、肥前窯業界は、輸出品から国内向けのやきもの生産へと方向転換していきます。それは、赤穂浪士の討ち入りがあった元禄年間（1688～1703）のことです。波佐見の窯も海外輸出品の生産をやめ、国内向けの磁器、とくに安い日用食器を生産するようになりました。

ところで、表題にある「くらわんか」とはいったい何なのでしょう。この言葉の由来や波佐見焼との関連をみていきましょう。

江戸時代、大坂・京都間の重要な交通手段として、淀川<sup>よどがわ</sup>を行き来する三十石船<sup>さんじゅうこくぶね</sup>が利用されていました。この船に小舟で近づき、「あん餅くらわんか、酒くらわんか」とかけ声をかけながら、酒や食べ物を器に盛って売る商いが繁盛していました。小舟はそのかけ声から「くらわんか舟」、使われた器は「くらわんか茶碗」と呼ばれ、この器は、食べ飲みした後、淀川へポイと投げ捨てられていたそうです。<sup>(註2)</sup>その後、いつの頃にか、江戸時代の使い捨てされるぐらいの安い日用食器を総称して、「くらわんか手」と呼ぶようになったとされています。

元禄の頃から幕末まで、波佐見では安い日用食器「くらわんか手」を大量に生産し続けました。後述する窯の数や大きさから考えれば、その生産量は全国一であったと考えられます。当時の波佐見は、まさに「くらわんか」の時代であったのです。

平成3年（1991）に中尾地区の中尾上登窯跡<sup>なかのおのぼりかまあと</sup>の発掘調査が行われましたが、窯の部屋数33室程、全長160mに及ぶ、世界最大規模の登窯であったことが判明しました。この部屋数は、天保年間<sup>てんぽう</sup>（1830～1843）頃にまとめられた『郷村記』<sup>ごうそんき</sup><sup>(註3)</sup>の数値とほぼ一致をみえています。

『郷村記』によれば、天保年間頃、波佐見では全長100mを越える巨大登窯が8基存在し、全体で年間48,446俵のやきものを生産していたことがわかります。1俵当たり何個のやきものが積み重ねられていたかは定かではありませんが、膨大な量であったことは間違いありません。

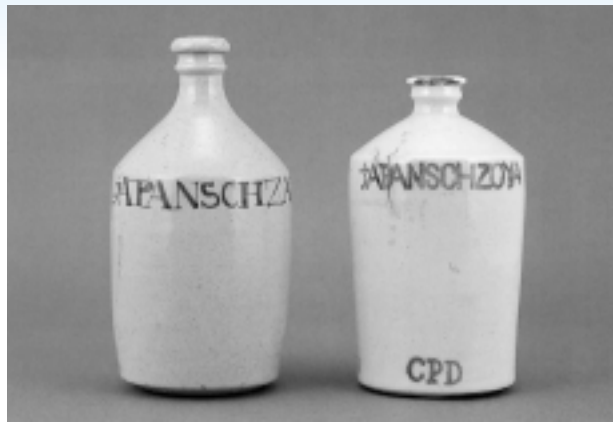
「くらわんか」の時代、波佐見では、碗・皿をはじめ、様々な種類の磁器が生産されていました。量産品のため丁寧な作りではありませんが、素早い筆使いによって生き生きとした模様が描かれ、やや灰色がかった釉色やぼってりとした量感<sup>そぼく</sup>に素朴な温かみを感じとれます。これらのやきものは、三越浦<sup>みつごえうら</sup>（長崎県川棚町）や伊万里津<sup>い万里</sup>（佐賀県伊万里市）<sup>(註4)</sup>から船で全国中へ運ばれ、当時の多くの人々に愛用されていました。全国の江戸時代の遺跡からほぼ確実に波佐見焼が出土することは、そのことを如実に示しています。波佐見焼は、江戸時代のベストセラー商品だったのです。

江戸時代の終わりから明治、大正時代にかけて、波佐見では海外輸出用の酒や醤油をいれる瓶<sup>びん</sup>が量産されていました。コンプラ瓶です。



くらわんか茶碗

なかがい  
仲買を意味する「コンプラドール (Comprador)」というポルトガル語に由来する長崎出島の商人 コンプラ仲間 が取り扱っていたことから、そう呼ばれるようになりました。コンプラ瓶には、「JAPANSCH ZAKY」もしくは「JAPANSCH ZOYA」というオランダ語が書かれています。意味は、前者が「日本の酒」、後者が「日本の醤油」であり、出島からヨーロッパや東南アジア諸国へ向けて大量に積み出されていきました。ロシアの文豪トルストイも一輪挿しとして愛用していたと伝えられています。(註5)



コンプラ瓶 (江戸期) (明治期)

「くらわんか」の時代の波佐見は、世界に類を見ない巨大な登窯を築き上げ、膨大な量の磁器を産み出していました。この大量生産によって、やきもの1個当たりの値段を下げ、それまで高価であった磁器を庶民が購入できる安い品物へと変えていったのです。磁器を庶民に広く普及させるのに大きな功績を残し、また、日本のやきもの文化へ多大な影響を与えたと言えるでしょう。現在、私たちは普段なにげなく磁器の器を使っていますが、その礎を築いたのは、実は波佐見なのです。

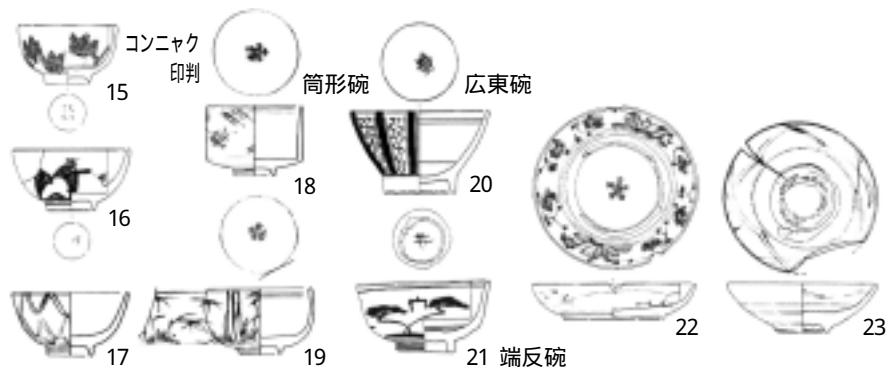
(註1) 展海令：1684年

(註2) この点の真偽は定かではないが、20年ほど前までは、淀川の川べりから輝いたくらわんか茶碗や皿が、たくさん採集されていた。

(註3) 藤野保編『大村郷村記』第三巻 国書刊行会 1982

(註4) 天保6年(1835)、伊万里から積み出された波佐見焼は、3万7百俵。『伊万里歳時記』

(註5) 井伏鱒二氏の「長崎の醤油瓶」(昭和27年)という随筆に書かれている。



## ポイント

### 1680年代～1860年代

巨大窯による大量生産体制 全国中の一般庶民へ供給 江戸期のベストセラー商品

くらわんか茶碗・コンプラ瓶生産 くらわんか茶碗 磁器を庶民層へ広めるのに貢献

### 『郷村記』における波佐見皿山の状況 天保年間(1830～1843)頃

地区 古文書での名称	現在の窯跡名	窯室数	窯全長	戸数	窯焼数	年間やきもの 生産量	年間 使用本数	薪 本数	唐臼数
三股地区		計68室		108軒	26人	13,230俵	1,378,000本		110丁
上登釜	三股上登窯跡	23室	115m						
下登釜	三股本登窯跡	24室	120m						
新登釜	三股新登窯跡	21室	105m						
永尾地区		計29室		44軒	10人	6,620俵	627,000本		40丁
永尾皿山	永尾本登窯跡	29室	155m						
中尾地区		計98室		150軒	26人	21,966俵	2,056,000本		150丁
上登釜	中尾上登窯跡	33室	160m						
下登釜	中尾下登窯跡	26室	120m						
大新登釜	大新窯跡	39室	160m以上						
皿山地区		計20室		66軒	12人	6,630俵	840,000本		27丁
稗木場皿山	皿山本登窯跡	20室	100m						

\*「現在の窯跡名」と「窯全長」は、筆者の推定。

## 6 明治・大正時代

明治3年(1870)、寛文6年(1666)から続いてきた皿山役所が閉鎖され、大村藩の支援がなくなると、巨大な登窯は生産を停止するか、または、分割され個人所有の小規模な窯へと転じました。

明治時代の幕開けとともに、資本を失った波佐見窯業は存亡の危機を迎えます。しかし、陶工達は新たな技術の開発・導入を積極的に行い、窯の火を絶やさぬよう努めました。また、明治35年(1902)、陶磁器意匠伝習所を設立して優れた職人の育成を行い、明治38年(1905)には、上波佐見村陶磁器信用組合を結成し、業界の振興を図ります。波佐見窯業は自活の道を歩みだし、再び、江戸時代の活気を取り戻していきます。

明治時代の波佐見では、江戸時代に引き続き、日用食器を中心に生産していきます。明治8年(1875)頃に「型紙刷り」(註1)(カップ刷り)、明治24年(1891)頃には「銅版転写」(註2)が採り入れられ、湯呑みや碗に緻密な模様が刷られるようになります。この時代、最も盛んに生産されていたものは、徳利です。明治17年(1884)の記録によれば、波佐見全体で年間10万1376本の徳利が生産されていたことがわかります。(註3)また、明治中頃の最盛期には年間35万本も作られ、全国中へ運ばれていました。その他に、明治20年(1887)頃から、朝鮮半島への輸出用壺が作られ始めたと言われています。

大正7年(1918)、長崎県東彼杵郡陶磁器株式会社の設立によって、窯業界の土台は安定したものとなり、大正時代の末期には、「鋳こみ」や「石膏型」「機械口クロ」の導入によって、多彩な製品が量産されるようになりました。また、大正14年(1925)に、石炭窯が波佐見で初めて中尾地区に築かれ(註4)、以降、それまでの登窯にかわり、生産の主役となっていきます。

明治から大正時代の波佐見窯業は、職人、企業人をはじめ、多くの人々の努力によって好不況の波をのりこえ、近代的な産業へとたくましく成長していったのです。

(註1) 模様を切り抜いた紙型を器にあて、その上から絵の具をすり、模様を表す手法

(註2) 銅板に模様を彫り、それに薄紙に印刷し、その薄紙を器に付着させる手法

(註3) 『東彼杵郡村誌』

(註4) 「山慶」

### ポイント

#### 1860年代～1920年代

新たな技術の導入 コバルト・天草陶石の導入等 近代産業への転換

徳利生産 最盛期年間10万本以上生産 「通い徳利」「貧乏徳利」



智恵治窯跡



徳利



爛徳利



## 7 昭和時代

昭和初頭の大不況をのりきった波佐見窯業は、その後ただちに活発な動きを見せます。石炭窯が次々と築かれ、窯元は山間部から平野部へ進出していきます。また、昭和5年(1930)には、長崎県窯業指導所ながさきけんようぎょうしどうしょが開設され、新しい窯業技術の研究や指導が行われるようになりました。窯業界も昭和9年(1934)波佐見陶磁器工業組合とうじきこうぎょうくみあいを設立し、その拠点を作り上げます。昭和のはじめ頃、波佐見では洋食器や酒樽などが盛んに作られていました。

昭和12年(1937)日本は日中戦争を引き起こします。かつて、肥前へ様々なやきもの技術を発信した朝鮮半島や中国大陸は、日本軍の侵略によって戦場となり、多くの悲劇が産み出されることとなります。

国内も次第に戦時体制に組み込まれ、窯業界は様々な統制を受けます。昭和15年(1940)には、やきもの価格の制限、またやきものに記されていた窯元の名前は消され、番号化されてしまいました。<sup>(註1)</sup>

昭和16年(1941)太平洋戦争が勃発し、日本はさらなる泥沼へ進んでいきます。多くの職人は戦場へとられ、また、燃料の制約や減産令によって、波佐見窯業の苦難の時代は続きます。そして、戦局が悪化し、物資が乏しくなると、水筒や手榴弾しゅりゅうだんまでもやきもので作られます。

昭和20年8月15日、日本は戦争に敗れ、再び平和な時代が訪れます。戦争で失った時間を取り戻すように、波佐見窯業はいち早く再建にのりだしました。そして、昭和30年代の神武景气しんむを足がかりとし、以降、日本経済の急速な成長による購買力の高まりに支えられ、さらに、道路整備による流通網の発達、窯業技術の進歩・近代化が要因となって、波佐見窯業はこれまでにない飛躍的な発展をとげていきます。

戦後の波佐見は、国民の多様なニーズに応えるように、様々な日用食器を生産します。

先へ先へと進む波佐見焼でしたが、同時に、歴史や伝統をふりかえる気運も高まりをみせます。昭和43年(1968)には、波佐見焼創業370年祭が行われますが、その際に、陶祖李祐慶りゆうけいの顕彰碑けんしょうひが建立され、波佐見の地に窯業を伝えた大恩人として奉まつられることとなりました。また、昭和54年(1979)波佐見町内古窯跡群の分布調査なかあしものぼりかまあと、中尾下登窯跡の発掘調査、そして、昭和56年(1981)には畑ノ原窯跡の発掘調査が行われ、



染付刷毛目文急須・湯呑み



戦時中の磁器 海軍食器 白磁手榴弾



化粧掛け水玉文急須



吹きかけ格子文湯のみ

吹きかけピカソ・マチス文蒸茶碗



グッド・デザイン賞受賞品 G型醤油差し ブルーライン灰皿



「芽ばえ」湯呑・茶碗

「若竹」茶碗

考古学による窯業史の解明もスタートしました。

昭和53年(1978)、波佐見焼は、通産省によって「<sup>でん</sup>伝統的工芸品」に指定されます。この指定によって、江戸時代以来の伝統が保護されるとともに、「波佐見焼」の名前も、その知名度を上げていくことになります。

(註1)「波」 例え、「幸山」は「波11」となった。



蛸手皿

### ポイント

#### 1920年代～1980年代

戦争による荒廃と戦後の復興 「統制陶器」 陶製手榴弾生産 高度経済成長  
 多彩な製品の大量生産 窯業技術の進展 流通網の発達

## 8 現 代

平成4年(1992)、「ながさきけんようぎょう しけんじょう長崎県窯業試験場」は新設移転し、「ながさきけんようぎょう ぎ じゅうつ長崎県窯業技術センター」として生まれ変わりました。新たな設備によって、窯業技術の研究・指導はさらに充実したものとなっています。また、同年、地元の波佐見高校に、やきものを通した教育、後継者育成の場である「とうしんかん陶心館」が完成しています。

平成5年(1993)には、畑ノ原窯跡の復元・保存工事がしゅんこう竣工します。復元登窯に火が入れられ、約400年の時を越えた陶工達の交流が行われました。

波佐見町施行40周年を迎えた平成8年(1996) 中尾地区が「陶芸の里」として整備され、江戸時代から続く窯場に一層の魅力が加わります。そして、この年、「やきもの」をテーマとした世界・ほのお焔の博覧会が、佐賀・長崎・福岡の三県で開催されます。長崎県会場の一つであった波佐見町には20万人もの来場者が訪れました。開催中、波佐見高校の野球部が甲子園に初出場したこともあり<sup>(註1)</sup>、大変な盛り上がりを見せます。また、開催にあわせて、宿泊施設・体験工房を持つ「中尾山交流館・伝習館」、世界12基の窯を復元・屋外展示した「世界の窯広場」など、やきもの作りの楽しさや奥の深さを学べる施設がオープンしています。

第1章で述べたように、波佐見焼の国内シェアは13%を占めており、茶碗、湯呑みなどの日用食器をはじめ、「ニュー・セラミックス<sup>(註2)</sup>」、「給食用食器」など、様々なやきものが生み出されています。近年の「平成不況」により、やきものの生産高、販売額はともに落ち込みを見せていますが、波佐見窯業は、その潜在的に高い生産力、技術力を保ちながら、今後のさらなる発展へ向け日々努めているのです。

波佐見焼の400年に及ぶ長い歴史は、職人達の卓越した技術によって支えられてきました。その技術を今に受け継ぐ「伝統工芸士」、「技能士」は、現在、波佐見町に58人を数えます。また、「現代の名工」は4人、そして、平成9年(1997)には、田澤大助氏が、波佐見で初めて「長崎県無形文化財」の指定を受けています。今後も、一人でも多くの「職人」が世に出て、波佐見焼の伝統を後世に伝えていってほしいと願います。

(註1) ベスト8と大活躍

(註2) 精選された原料を高度な技術で合成した新しい「やきもの」。IC基板、ナイフ、エンジンなどがある

